

相談援助の理論と方法

問題 98 ベルタランフィ(Bertalanffy, L.)の「一般システム理論」を構成する概念に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 システムを、有機体としてではなく、機械論的な立場からとらえる。
- 2 システムを、外部環境に対して開かれている開放システムとしてとらえる。
- 3 システムの変容結果は、初期条件によって決定づけられるものとする。
- 4 システムを、要素還元主義の立場から、全体は部分の総和であるとする。
- 5 個々のシステムを独立したものとしてとらえ、システム間の非階層性を強調する。

問題 99 事例を読んで、家族システムの視点に基づいたA社会福祉士の対応に関する次の記述のうち、最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事例〕

Bさん(48歳, 男性)は, 専業主婦の妻(46歳), 息子(17歳), 娘(14歳)と4人暮らしである。Bさんは, 優秀な会社員であり, 家族関係も良好であった。ところがBさんは, 半年くらい前から物忘れが増え, 仕事のミスが目立ち, 病院で検査をした結果, 若年性の認知症であると告げられた。Bさんは自暴自棄になり, 妻や2人の子どもに対して当たり散らすなど, 家族関係は悪化した。妻から相談を受けた医療ソーシャルワーカーのA社会福祉士は, Bさんとその家族に対応した。

- 1 家族間相互のストレスを緩和するために, 一時的に別居することを勧めた。
- 2 家族システムの開放を目指して, 近隣住民にBさんの家族を頻繁に訪問して見守ってもらうように依頼した。
- 3 家族関係悪化の原因は, Bさんの荒れた態度だと判断し, その改善を図るために, Bさんとの面接を繰り返した。
- 4 家族の規範に配慮しつつ, Bさんの状態に対応して, それぞれの役割を見直すよう家族で話し合うことを促した。
- 5 家族内で問題が解決できるように, 妻との面接を繰り返した。

問題 100 事例を読んで、C社会福祉士による生活モデルに基づいた対応に関する次の記述のうち、この段階で最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事例〕

Dさん(59歳)は刑務所での生活が長かった。独身で身寄りはない。出所後のDさんの地域生活の支援は、相談支援事業所のC社会福祉士が担当している。療育手帳の発給を受けた後、Dさんは、現在、中学校時代の同級生が経営する会社で、廃品回収の職に就いている。社長は、Dさんのために、社長命令で若手社員をサポート役として付けた。しかし、Dさんは廃品回収の仕事をなかなか覚えることができず、知らない土地での寮暮らしのため精神的にも不安定になってしまった。DさんとC社会福祉士との信頼関係は構築されており、定期的な面接のなかではDさんからの不満も聞いている。そして、最近では、頑固なDさんとサポート役の若手社員との関係も悪くなってきており、社長自身も困惑している。

- 1 相手が年下の社員でも、敬語を使い低姿勢で接するようDさんに指導する。
- 2 Dさんが廃品回収業務で自立できるように、丁寧な技術指導を行う。
- 3 新人であるDさんのために、全入寮者による歓迎会開催を社長に提案する。
- 4 社長にDさんへの協力を再度求め、関係者による話し合いへの同席を依頼する。
- 5 地元の自治会長にDさんを紹介して、地域活動への参加を勧める。

問題 101 相談援助における「個人」と「環境」をめぐる諸説に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 ジャーメイン(Germain, C.)らは、生態学の視点を用いて、個人に焦点化した適応概念について説明した。
- 2 ホリス(Hollis, F.)は、パーソナリティの発達を目指して、個人と社会環境との間を個別に意識的に調整することについて論じた。
- 3 パールマン(Perlman, H.)は、役割概念を用いて、役割ネットワークのなかで生成している存在として個人をとらえた。
- 4 バートレット(Bartlett, H.)は、人間にとってふさわしい場所の質は、その人の願望、能力、自信、環境の資源の機能によって決定されるとした。
- 5 ゴスチャ(Goscha, R.)らは、社会生活機能の概念を、環境からの要求と個人が試みる対処との交換及び均衡に焦点化してとらえた。

問題 102 課題中心アプローチに関する次の記述のうち、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 リード(Reid, W.)とエプスタイン(Epstein, L.)によって開発され、心理社会的アプローチ、問題解決アプローチ、行動変容アプローチなどの影響を受けて発達した。
- 2 ターゲットとなる問題は、クライアントの気づきの有無にかかわらず、クライアントの努力で解決できる可能性があるという基準によって選択される。
- 3 様々なアプローチを折衷したものであるため、それらを統合するためにシステム理論をその基礎理論としている。
- 4 現在の課題の元となる問題の原因を解明することから援助を始め、その原因の除去を援助の目標とする。
- 5 時間的な構造が重要と考え、援助に要する期間を早い段階から定めることを重視し援助を進める。

問題 103 ソーシャルワークのアプローチに関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 危機介入アプローチは、急性の心理的危機状態にあるクライアントに対して、新しい対処パターンを教示しつつ、長期処遇で対処能力を強化する。
- 2 実存主義アプローチは、実存主義思想による概念を用いて、クライアントが自らの存在意味を把握し、自己を安定させることで、疎外からの解放を目指す。
- 3 行動変容アプローチは、学習理論をソーシャルワーク理論に導入したもので、クライアントのコンピテンスの消去や強化により、問題行動全体の変容を図る。
- 4 解決志向アプローチは、社会変革のために、ソーシャルワーカーが解決イメージを提示しながら、解決方法を構築する。
- 5 フェミニストアプローチは、女性が体験している現実を自ら認識させ、個人が抱える問題の解決を意図した治療的なかかわりを支援の焦点とする。

問題 104 事例を読んで、E 社会福祉士による F さんへの援助に関する次の記述のうち、社会生活技能訓練に基づく支援として最も適切なものを 1 つ選びなさい。

〔事例〕

障害者就労支援事業所の E 社会福祉士は、就労後の職場での適応、定着を図るために、共通の課題をもつ知的障害のある若い利用者のグループで社会生活技能訓練を行っている。参加者の F さん(30 歳、男性)は清掃作業を行う会社に就職し、3 か月が過ぎたところである。派遣されたビルでの清掃の手順等も覚えて慣れてきたが、同僚や上司、派遣先の人とどう接していいのかわからず、疎外感をもち大変悩んでいた。このままでは人間関係が苦痛で仕事に行けなくなるという不安や、挨拶あいさつが大変苦手でありそれを克服したいという気持ちを持ち、社会生活技能訓練を行うこのグループに参加している。

- 1 F さんの疎外感や不安感の克服のために、グループで受容しあえるように導く。
- 2 上司にグループ活動への参加を依頼し、その場で指導や助言を行ってもらう。
- 3 挨拶あいさつが実際の場面でうまくできるよう、目標を設定して、練習に取り組む。
- 4 清掃技術向上のために技術指導者を派遣し、職場での実践的な支援を提供する。
- 5 F さんの人間関係の苦痛の緩和のために、できるだけ人と接触しなくて済む方法を考えて、練習する。

問題 105 事例を読んで、G相談員(社会福祉士)の対応に関する次の記述のうち、この時点で最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事例〕

ドメスティック・バイオレンスの被害者を支援する特定非営利活動法人に勤めるG相談員は、ある日、事務所に初めて電話をかけてきた女性による電話相談を受けた。この女性は60代で、現在、夫と二人暮らしをしている。最近、数年前に定年退職した夫がささいなことで怒り出すことがあるのだという。昨日も料理のことでいきなり怒り出し、口論となった末、暴言を浴びせられたとのことである。女性は、遠方に住む息子をはじめ、友人や親族にも相談できず、誰かに話を聞いてもらいたくて、この特定非営利活動法人に電話してきた。

- 1 氏名、住所を尋ね、地域の配偶者暴力相談支援センターを紹介する。
- 2 要点をメモしながら、すぐに結論を出さずに不安や不満を聴くことに努める。
- 3 虐待チェックリストを用いて質問し、虐待の状況と原因を明らかにする。
- 4 この特定非営利活動法人がシェルターをもっていることを伝え、入所を勧める。
- 5 直接会って面談した方が効果的であると伝え、来所するよう助言する。

問題 106 事例を読んで、総合病院のHソーシャルワーカー(社会福祉士)の対応に関する次の記述のうち、この段階で最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事例〕

アルバイトで生計を立てていた一人暮らしのJさん(48歳、男性)は、ある夜、酔って駅の階段から転落して足を骨折し、総合病院に救急搬送された。入院中に肝機能障害と診断された。現在は生活保護を受けてアパートで暮らしており、通院治療を受けている。ある日、Jさんは大量に飲酒し、せっかく見つけた仕事を失い、アルコール依存症との診断を受けた。また、最近では隣人ともたびたび口げんかをするようになった。主治医からの連絡を受けたHソーシャルワーカーは支援を行うこととした。Jさんはアパートで一人暮らしを続けていくことを希望している。

- 1 隣人に対して、Jさんの状況を説明して謝罪する。
- 2 Jさんとかかわり続けながら、アルコール依存症者の自助グループを紹介する。
- 3 Jさんが自分の問題状況に気付けるように、しばらく経過を見守る。
- 4 一人暮らしは困難であることを伝えて、生活保護施設への入所を促す。
- 5 主治医とともに、Jさんのアルコール専門病院への入院手続きを行う。

問題 107 事例を読んで、K生活相談員(社会福祉士)によるグリーフケアに関する次の記述のうち、この段階で最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事例〕

Lさん(85歳、女性)は、3年前に脳梗塞のうこうそくを患ってから半身麻痺はんしんまひとなり、自宅での生活を断念してP特別養護老人ホームに入所している。現在、要介護4の判定を受けており、ほぼ寝たきりの状態であるが、認知機能は比較的保たれており、日常的な会話は行うことができる。最近、長男夫婦から病院に入院していた夫が亡くなったことを聞き、ため息をついては「夫を弔いたい」と訴えている。K生活相談員は、ケアワーカーから様子を見てほしいという依頼を受け、ベッドサイドでLさんの手を軽く握りながら、「おつらいですね・・・」と話しかけた。Lさんは涙をうかべながら、「夫の最期のときに何もしてあげられなかった。私がこうして生きているのが申し訳ない」と語り始めた。

- 1 Lさんの気持ちに寄り添いながら、時間が解決してくれると慰める。
- 2 Lさんの心痛を考慮し、悲しみを増幅させないように別の話題に切り替える。
- 3 夫との生活を思い出しながら、悲しみや後悔を十分に語れるよう促す。
- 4 現在の生活に焦点をあて、前向きに生きるよう励ます。
- 5 Lさんが良き妻であったという、長男の評価を伝える。

問題 108 事例を読んで、Mソーシャルワーカー(社会福祉士)の効果測定に関する次の記述のうち、最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事例〕

エイズ治療拠点病院に勤めるMソーシャルワーカーは、日常的にH I V感染者やエイズ患者にかかわることが多い。H I V感染を告知された人の多くは、ショックを受け、絶望感を感じ、不安にさいなまれる。Mソーシャルワーカーは、これまで、そのようなクライアントへの支援として危機介入を行ってきた。

Mソーシャルワーカーは、自分の危機介入のあり方が本当に役立っているのか確認するために、病院の倫理審査委員会に諮った上で、効果測定を行うことにした。

- 1 これまで担当したクライアント全員に、Mソーシャルワーカーの対応に関するクライアントの考えを匿名で自由に記述して返送してもらって郵送調査を行う。
- 2 患者の不安に焦点を当てて、介入の前後でどのように変化したかをケースごとにモニターし、複数ケースの傾向をみる。
- 3 クライアントのエイズについての理解度が深まったか調べるために、現在、支援しているクライアントにアンケート調査を実施する。
- 4 主治医と家族に、クライアントの現在の様子についてインタビューする。
- 5 一般病院に協力を得て、そこでH I V感染を告知された患者グループとMソーシャルワーカーが支援した患者グループを比較し、その違いを検証する。

問題 109 解決志向アプローチにおける質問法に関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ミラクル・クエスチョンは、クライアントがこれまでに経験した奇跡的な体験について尋ねる。
- 2 スケーリング・クエスチョンは、クライアントの経験や今後の見通しを数値に置き換えた評価を尋ねる。
- 3 コーピング・クエスチョンは、クライアントがこれからどのように問題に対処するかを尋ねる。
- 4 エクセプション・クエスチョンは、クライアントがこれまでに経験した例外的な失敗体験について尋ねる。
- 5 サバイバル・クエスチョンは、クライアントがこれから生き抜いていく見通しについて尋ねる。

問題 110 事例を読んで、N社会福祉士のとるべき対応に関する次の記述のうち、この段階で最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事例〕

A子(11歳)は、半年前から不登校の状態にある。成績がよく、友人関係も良好なA子が不登校になる原因は、特に見当たらない。しかし、家族や小学校の担任が何度通学を促しても、A子は学校に行こうとはしなかった。不登校児支援の特定非営利活動法人に勤務するN社会福祉士は、家族の依頼を受けて、A子の自宅を初めて訪問した。A子は、最初は何も話さなかったが、少しずつ自分の家族について話し始めた。

- 1 開かれた質問を用いて不登校の理由を詳細に尋ねる。
- 2 家族関係に関する閉ざされた質問を連続して行う。
- 3 A子の発言のなかの重要な語句や内容を、A子にフィードバックして示す。
- 4 A子の登校意欲を高めるために要約の技法を用いたやりとりを行う。
- 5 A子が抱える葛藤^{かっとう}に焦点を当てて直面化を図る。

問題 111 地域包括支援センターのB社会福祉士は、一人暮らしのCさん(70歳、女性)が足首の骨折の治療を終え、自宅で生活していることを知った。Cさんは介護予防ケアマネジメントの対象となっている。B社会福祉士は、電話連絡の上、家庭訪問を行い、Cさんの話を聴くとともに介護予防プログラム等の説明を行った。Cさんは再度の骨折を恐れており、介護予防プログラムへの参加を希望した。しかし、家からの交通の便が悪く、移動手段がないということで利用が困難であった。B社会福祉士は、Cさんの希望が強いこともあり、また必要なプログラムであると考え、地域のボランティアグループに送迎サービスの実施を依頼し、プログラムの利用を実現した。

次のうち、B社会福祉士が行ったケアマネジメントの実践モデルとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 サービス提供者指向モデル
- 2 利用者指向モデル
- 3 セルフケアマネジメントモデル
- 4 積極的地域援助モデル
- 5 サービス仲介モデル

問題 112 事例を読んで、D相談員(社会福祉士)の対応に関する次の記述のうち、この段階における対応で、より適切なものを2つ選びなさい。

〔事例〕

U市の児童福祉課のD相談員に、子育て支援センターの保育士から、育児不安気味の母親が相談を希望しているという連絡が入った。D相談員はすぐに自宅に出向き、Eさん(33歳)が長男(2か月)を出産後、うつ状態で、外出もあまりできないこと、近くに頼れる人がいないこと、夫は仕事が多忙で育児に協力的でないことなどの話を聞いて、援助が必要と判断した。D相談員はすぐにネットワーク会議を開き、市保健センター保健師、子育て支援センター保育士、主任児童委員を集めて、援助方針を協議し、各々の役割分担を検討した。

- 1 市保健センターが行っている乳児家庭全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)を利用して、Eさんとの支援関係を築くようにする。
- 2 夫に育児に積極的に参加するよう主任児童委員から促してもらい、定期的な報告を夫に求め、自らも含めた三者で確認する。
- 3 ネットワーク機関からの情報を自ら一元的に管理し、必要とされる支援も自らが行う。
- 4 Eさんのニーズを確認しながら、養育支援訪問事業について説明する。
- 5 子育てサークルの情報を伝えて参加を促すため、子育て支援センターの職員からEさん宅へパンフレットを郵送させる。

問題 113 社会福祉施設内でのケース会議開催の留意点に関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 緊張感のある会議にするため、司会者やケース提供者による事前の打合せでは、事例の詳細には触れずに、主に時間配分について検討しておく。
- 2 施設に所属する職員が集まる貴重な機会なので、時間の制約を設けず、多くのケースについて、できるだけ丁寧に検討できるようにする。
- 3 援助内容についての正しい見解を共有することが大切なので、職員間の意見が分かれた場合は、多数決により民主的に決定する。
- 4 ケース会議は、援助の向上のみならず、職員教育の意味合いもあることから、終了後は会議内容の要約を参加メンバーで交代して作成し、共有する。
- 5 施設や利用者に対する地域の理解を促すために、希望する地域住民にはケース会議の傍聴を認め、啓発活動の機会とする。

問題 114 グループワークの作業期における援助者の役割に関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 プログラム活動を順調に進めていくことが必要な時期であることから、できるだけ具体的な指示を出しながら、グループ全体の力量を高める。
- 2 サブグループができた場合には、グループ全体の仲間意識の構築やグループ運営に良い影響を与えるかどうかを見極めて対応する。
- 3 メンバー同士の衝突や摩擦が起これば、グループ活動による効果が得られなくなるので、できるだけ事前に回避するように働きかける。
- 4 孤立するメンバーが現れたときには、仲間意識を高めるチャンスとして、そのメンバーに個別にアプローチするよりも、対応はグループの主体性にゆだねる。
- 5 メンバー同士の交流が深まった時期なので、グループ内の役割分担をいったん解消して、メンバーのグループからの自立を促すように働きかける。

問題 115 事例を読んで、児童館のF職員(社会福祉士)によるグループワークの終結期における対応に関する次の記述のうち、最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

昨年7月に、児童館で行っている子育て講座をきっかけにメンバー8人の子育てサークルができあがった。児童館は、その後の活動拠点ともなっている。F職員は、サークルの運営について相談に乗るとともに、様々な子育て支援情報の提供を行い、グループワーカーとしてグループ活動に関与してきた。この結果、グループ内での相互作用が高まり、多様な働きかけのなかで得た成果にメンバーは満足し、グループワークは成功したように思えた。しかし、子どもたちの幼稚園入園とともにサークル活動も終了する段階になると、メンバーの何人かが、F職員に子どもの養育などについての不安を個別に表明してきた。

- 1 グループのリーダーに終結に向けた取組を任せる。
- 2 最後の数回のグループ活動では、子育てに関する知識を補完することを目的に子育て講演会を実施する。
- 3 活動終了後における自助グループの立ち上げを行い、そこへの参加をメンバー全員に求める。
- 4 メンバーの不安を解消するため、このグループ活動を延長する。
- 5 メンバー自身が活動を振り返り、個々の不安をメンバーで共有できる機会を設定する。

問題 116 V市社会福祉協議会では、要介護高齢者の在宅での介護を行う主たる家族介護者を対象としたグループワークを実施している。グループに参加した主婦のHさん(55歳)は、介護に協力的でない夫への不満や、自らが介護している義母との関係にストレスを抱えていた。しかし、自分のことを他人に話すのは恥ずかしいという気持ちや、こんなことで悩んでいるのは自分だけだという思いもあって、黙っていることが多かった。しかし、他のメンバーが自分と同様の悩みや協力してくれない家族の愚痴などを話すのを聞いているうちに、自分自身の状況に対して違った見方でとらえることができ、自分の気持ちや状況について、自ら表現して話をすることができるようになった。

次のうち、Hさんの変化に見られるようなグループ活動の効果を表すものとして、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 波長合わせ
- 2 観察効果
- 3 集団思考
- 4 感情転移
- 5 普遍化

問題 117 J社会福祉士が部下のK社会福祉士に対して行うスーパービジョンに関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 利用者から、K社会福祉士についての苦情を聴き、すぐにそれを施設管理者に人事考課のための情報提供として伝える。
- 2 K社会福祉士が、利用者とかかわるのがつらいと話しながら泣いてしまったので、共感を示すために一緒に泣く。
- 3 K社会福祉士の業務負担や力量、そしてケースの困難度を勘案して、担当ケース数を配慮する。
- 4 利用者への支援について、K社会福祉士から逐一報告してもらい、効率的に業務を遂行するために細かく指示を出す。
- 5 K社会福祉士が、利用者の意向を確認していないことがよくあることを指摘し、上司として自分が利用者の意向の確認を行う。

問題 118 相談援助における記録に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 叙述体による記録では、実践の説明責任を示す根拠となるよう、事実の経過とともに、面接のやりとりを発話どおりに文字化する。
- 2 他機関からの報告は、記録の客観性を担保するため、ワーカーの判断を混じえず、かつ内容の取捨選択をせずに逐語体で記述する。
- 3 ワーカー・クライアント関係を中軸に行われる実践の記録では、事実関係に加えて、ワーカーの判断やその根拠を記述する。
- 4 記録は文字情報として残されるので、状況や援助過程を明確に把握・伝達するために図式化は控え、文章で説明する。
- 5 記録はクライアントに開示されることがあるため、本人に不愉快な思いをさせないために、本人に不利益な情報は記載しないよう作成する。